

# 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成26年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム	申請大学名	東京大学
申請大学長名	濱田 純一		
プログラム責任者	原田 昇		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初期段階としてプログラムは全体的に着実に実施されており、プログラムへ参画している学生の質も、学生との意見交換をとおり高いものと感じられた。</li> <li>・プログラムが想定し、養成しようとするグローバル・リーダー像に曖昧なところが残るが、学生のモチベーションは高く、英語の実践訓練的なゼミの実施など、学生のモチベーションにかなったコースワーク設定がなされている。</li> <li>・幅広い分野のプログラム担当者やインストラクター、特任助教が参加して研究指導とディスカッションを行う、必修科目の分野横断的なコアセミナーに、学生は明確な問題意識をもって取り組んでおり、異分野、異領域の学生たちとの間の横断的なつながりが効果を発揮し、老年学に対する新たな問題提起などを行っていくことが今後大いに期待される。</li> <li>・一方、プログラムが最終的に目指す到達点が学生に十分に浸透していないのではないかという印象をもった。</li> <li>・本プログラムにおいて、分野横断的な講義・演習、研究指導を推進するため、またメンターとして多くの特任助教が雇用されているが、本プログラムの教育研究活動に関わったことが、雇用された彼らの将来のキャリアのなかで肯定的に生かされるよう、彼ら自身も分野横断の実をなすことが期待される。</li> <li>・本プログラムへの参画は、学生にとっては付加的なものとなるが、コースワークの時間割まで含めて現在のシラバスはやや負荷が大きいものと考えられる。次年度以降のシラバス策定にあたっては、第1期生の意見を取り入れていく必要がある、との印象をもった。</li> </ul> <p>2. 意見(改善を要する点、実施した助言等)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラムで養成しようとするグローバル・リーダーの具体像等、本プログラムの到達点をより具体的且つ可視的なものとして学内外に呈示することが肝要であり、日本における老年学についての取組を各国の高齢社会の状況を俯瞰しながら先端的な課題解決のアプローチとして世界に示す方策を、プログラムのなかでより意図的に追究していくべきである。これによって、本プログラムの将来像が明確となり、かつ教育内容の蓄積性・継続性が学生にも納得されるであろう。</li> <li>・高齢者のあいだにも存在する社会的、経済的格差やばらつきなどを十分に考慮し、単にアクティブ・エイジングを志向するだけのプログラムとならないよう、人間にとって老齢であることの全体を見渡し、21世紀の高齢社会のあるべき像を多面的に見出せる方向を示す教育内容となるよう、心がけて欲しい。</li> <li>・東京大学の各部局で現在行なわれている高齢化に関わるさまざまな問題意識に基づく教育研究を、今後、高齢社会総合研究機構が中核となって総合老年学としてまとめ本プログラムに還元することにより、本プログラムで養成する人材が、グローバル・リーダーとしてより高いレベルとなりうるような全学的な取り組みを期待する。</li> </ul>			